

歴史を訪ねて...

笠岡市の文化財



持宝院の梵鐘
県指定重要文化財
(工芸考古)

「走出のお葉師さん」こと持宝院には、銘文のあるものとしては県下最古の梵鐘(釣鐘)があります。鐘の側面には、ふたつの銘文が刻まれています。最初の銘文から、鎌倉時代の建長三年(一二五二)に、肥前三郎藤原資泰が頂見寺(現在の井原市野上町にあった寺)のために造った鐘であることが分かります。肥前三郎資泰は那須与一の子孫といわれ、後月郡荏原庄を領有していました。

時は流れて戦国時代、成羽の三村氏と矢掛の庄氏が頂見で合戦した際に、庄氏がこの鐘を猿掛山の城へ持ち帰り、陣鐘として使うようになったといえます。ところが宇喜田直家に攻められて猿掛山は落城。この戦いで鐘は山上から下を流れる小田川に転がり落ちたと言われ伝えられます。

その後、地元の人がこの鐘を所蔵しているのを聞いた走出の領主小田乗清がこれを買取り、永禄十二年(一五六九)、当時この地にあった延福寺に寄進しました。そのいきさつが、鐘に追銘として刻まれています。

江戸時代に、延福寺から持宝院へと受け継がれた梵鐘は、今日なおその音を近郷に響かせています。

展覧会と行事のご案内

開館25周年記念

詩心 竹喬
—竹喬美術館珠玉の数々から(後期展示)—
~2月3日(日)

楽しむ土曜講座
「南画を考える」のご案内
第2回「紀州南画」
講師：近藤壮氏
(和歌山市立博物館学芸員)
1月12日(土)
13:30~15:00
聴講は無料です。美術館までお申込下さい。

〒714-0087
笠岡市六番町1-17
☎63-3967
ホームページ
<http://www.city.kasaoka.okayama.jp/0013/0001.html>

「手紙の整理など雑務をやらされたりすると参ってしまいます。絵を描くのは夢があるから楽しいし、うまくいかなければそれで自分に課せられた問題ですから。芸術家は一生を重荷を負わされ苦しいのですが、どこか救われるところがあるのですね」
(竹喬のことば)

86歳の竹喬の言葉。描くことは「夢があるから楽しい」が、「一生の重荷」でもあるという。ひとつのことに生涯をかけて取り組んだ人の、重みのある言葉である。



雪ウサギ

小野竹喬 作
昭和15(1940)年頃
20.7×30.7cm

竹喬美術館の光彩 61

係から

年があらたまると、新しい年を取り敢えず忘れて、新しい年を自分に都合の良く思い描いてみる。これから過す一年間に向き合うとき、心の平安を得るためには良いことだと思えます。初夢も然り「あつたらいいな、できたらしいな」と、私たちが「夢」にみたものを、科学と技術の進展は実現してききました。ことに近年では科学上の発見から技術として応用されるような生活に影響を与え、人々の社会生活に時間を短くするよう短くなっています。新しい技術は新しい概念を伴っており、受け入れる側に意識改革を要求します。時には、心の準備が追いつかないため「ついていけない」と萎縮してしまったりします。しかし、恐れることはない、人間が作り出したものです。

「広報かさおか」は新しい技術に対しては前向きであることを常に意識して、時代と共に進んでいきたいと思えます。(良)



土屋武之 笠原良一

発行日/平成20年1月1日
発行/笠岡市役所
編集/企画政策課
〒714-8601 笠岡市中央町1-1
☎69-2110

印刷/株国輝堂 ☎67-5111

笠岡市ホームページ: <http://www.city.kasaoka.okayama.jp>
メールアドレス: kouhou@city.kasaoka.okayama.jp



※この広報は再生紙を使用し地球環境にやさしい植物性大豆インキで印刷しています。



古紙配合率100%の再生紙を使用しています